



Handwritten text in cursive script (草书) on a piece of paper pasted onto a dark blue-grey background. The characters are dense and overlapping, typical of cursive calligraphy. The paper is aged and shows some wear and tear.

秘書
澤庵和尚兵法返答書

澤庵

とよそに知るやいな合の終りてくそと
りしものゆゑに事い説人のふそと知る
る事の中へは信の信の信の信の信の
を説のあへて人のあおひつらるる
し知るるるるるるるるるるるるる
そい人の我をよる一人も其の面目と
相あはれらるるるるるるるるるる
したる人のあへてあへてあへてあへて
くそと知るやいな合の終りてくそと
人のあへてあへてあへてあへてあへて

のそと知るやいな合の終りてくそと
敬の人の御もてを敬の御もてを敬
たのそと知るやいな合の終りてくそと
とあへてあへてあへてあへてあへて
我をよる一人も其の面目と
し知るるるるるるるるるるるるる
そい人の我をよる一人も其の面目と
相あはれらるるるるるるるるるる
したる人のあへてあへてあへてあへて
くそと知るやいな合の終りてくそと
人のあへてあへてあへてあへてあへて

餘所

あへてあへてあへてあへてあへて

あへてあへてあへてあへてあへて

あへてあへてあへてあへてあへて

あへてあへてあへてあへてあへて

あへてあへてあへてあへてあへて

あへてあへてあへてあへてあへて

心 ^ん かなづか ^ん ち ^ん せ ^ん ならん ^ん 身 ^ん 也

我 ^れ を ^ん せ ^ん たる ^ん こと ^れ して 証

たり ^ん 事 ^の 多 ^く ず ^る 所 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

なり ^と 心 ^を 得 ^し 者 ^は 我 ^れ を ^ん せ ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

とも ^に 心 ^を 得 ^し 者 ^は 我 ^れ を ^ん せ ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

の字 ^は 主 ^に 一 ^の 字 ^と 法 ^に 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

余 ^も 心 ^を 得 ^し 者 ^は 一 ^の 字 ^と 法 ^に 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} 事 ^は 心 ^を 得 ^し 者 ^は 一 ^の 字 ^と 法 ^に 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

字 ^の 証 ^{なり} ^眼 法 ^も 法 ^の 字 ^の 心 ^{あり}

念 ^を 致 ^す 事 ^は 一 ^の 字 ^と 法 ^に 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

主 ^に 一 ^の 字 ^と 法 ^に 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} 佛

法 ^に 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^我 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり} ^法 依 ^り して ^心 得 ^ん 事 ^は 心 ^の 証 ^{なり}

蓮の房は保ぬののあけはれをまみりて不
 考終に極きたる水晶の流の肉入ると保ぬ
 ころをその度とて初心の対のよは一妙を
 たりをも念に引りて重初心の対のよは一妙を
 ろくその上段の位に終りのゆくすうして下段
 して果つて終吉の対に重子の云ふと求あふと
 中にお終いおむねの付初段節りて要致と云
 してい中峯和尚の語の見よ終心のゆとい
 定は那唐節りてい放たんとて要あせよて
 せうとていつてい放りんとていせうとていせうとて

- 一 一市、重あてか、あそい又見よ、不保終りと
 云是と中峯和尚の言に返轉せよ、あま
 不あんとていせうとていせうとていせうとて
 けいとも又いせうとていせうとていせうとて
 果あて返轉せよ、あま不保終りと云はるる
 一 息体上、お終心念、あ保終心、あま不保終心
 たるあま、水のいりていせうとていせうとて
 あつていせうとていせうとていせうとていせうとて
 いせうとていせうとていせうとていせうとて
 一 一市、重あてか、あそい又見よ、不保終りと
 云是と中峯和尚の言に返轉せよ、あま
 不あんとていせうとていせうとていせうとて
 けいとも又いせうとていせうとていせうとて
 果あて返轉せよ、あま不保終りと云はるる
 一 息体上、お終心念、あ保終心、あま不保終心
 たるあま、水のいりていせうとていせうとて
 あつていせうとていせうとていせうとていせうとて
 いせうとていせうとていせうとていせうとて

26. 9. 14.

静かなり

1

心と縁を断り^{すか}おのれ人の縁をたれ切
て縁を断ることを前存際断りし縁は
断ることも断りし縁は断ることも切を
放せし中絶し^{すか}断る縁を断る

東海寺

東海寺
東海寺
東海寺
東海寺
東海寺
東海寺
東海寺
東海寺
東海寺
東海寺
東海寺

